

シンポジウム「音楽アーカイブのまち・金沢をめざして」

金沢蓄音器館館長
八日市屋 典之

2015年の3月28日に金沢蓄音器館（写真1及び2参照）で開催されたシンポジウム「音楽アーカイブのまち・金沢をめざして」の様子をレポートする。



写真1. 金沢蓄音器館外観



写真2. 金沢蓄音器館コレクション

金沢では、3万枚を超すSPレコードと600台以上の蓄音器を当蓄音器館が保有し、金沢工業大学がLPレコード24万枚以上を金沢工業大学が保有している。また、石川県立歴史博物館には蓄音器とSPの「鞍コレクション」もある。金沢は、明治末期からの「近過去（きんかこ）」の音楽ソフトとその再生用ハードが集まっている全国的に見ても稀有な街と言ってもいい。音ばかりでなくその周辺の解説書、カタログ、デザインなど時代を語る資料もある。いわば日本の音・音楽が集積されており、金沢は「音楽アーカイブのまち」になり得る要素があると言えるのではないだろうか。3月28日（土）、その要素をどのように活用すればよいかを討議しようと当館でシンポジウムを開いた

集まったメンバーは、日本オーディオ協会会長の校條亮治（めんじょう りょうじ）氏、同協会諮問委員の穴澤健明（あなざわ たけあき）氏、金沢工業大学教授兼ライブラリーセンターの竺覚暁（ちく かくぎょう）氏、国立国会図書館電子図書館課の奥村さやか氏、エイベックス(株)顧問で当金沢蓄音器館名誉館長の飯田久彦（いいた ひさひこ）氏。

司会は小生がつとめた。

以下にその要旨を記載する（文中敬称略）。

校條：オーディオ・ハード業界の現況とハイレゾ・オーディオについて。

1986年にオーディオ業界の国内市場規模は出荷統計上最大の7700億円だった。これはカラー-TV市場とほぼ同規模だったが、デジタル化推進の結果2000年には1/3になってしまった。

デジタル化により機器の利便性が追求された。その結果「良い音を届ける」ことが希薄になったかもしれない。現在では「体感音楽」ともいえる「ダンスミュージック」中心になってしまった。本当に「感性価値」の高い心地よい「音楽」と言えるのか疑問に思える時がある。1982年、日本はCDの開発で世界の先頭を走り、CDは世界のスタンダードになった。それ以来日本が世界をリードした商品は生まれていない。昨年日本オーディオ協会は32年ぶりに「日本発、世界初」の新技术、新製品情報を発信した。それが、今話題の「ハイレゾ」だ。米国のCEA(コンシューマー・エレクトリック・アソシエーション)とも「パートナー契約」を締結し、名実ともに「ハイレゾ・オーディオ」が世界のスタンダードになったと思っている。

我々は先人の創った「モノ・コト」を良く知らないで現在を語ることは出来ない。また新たな「モノ・コト」を創りだすことも出来ない。「プロダクト」であろうと「ストーリー」であろうと同じである。良く見る、良く聴く、良く触る、良く知ることがあって新たなことが生まれるのである。その意味では「アーカイブ」は極めて重要なことであると思っている。この金沢はそれが出来る文化的要素を多く持っている街であると大いに期待している



写真 3. 校條 亮治氏 (日本オーディオ協会 会長)



写真 4. 穴澤 健明 (日本オーディオ協会 諮問委員)

穴澤：当金沢蓄音器館にも貴重なアーカイブが残されている。その最近の動向を紹介させていただく。終戦から70年たったが、玉音放送が非常に良い音で録音されていたことはあまり知られていない。この録音には円盤録音機が使われた。昭和11年のベルリンオリンピックでは、円盤録音機が活躍した。次の東京オリンピックのために、日本放送協会はフィルモンの技術部長であった坪田(のちに電音/DENONを創設)に開発を依頼した。坪田が開発したレコード盤上に溝を切るカッターヘッドは、先行の欧米製品よりも優れた物理特性を持っていたが、肝心の東京大会は開催されなかった。そしてこの国産円盤録音機は、東京電気(現在の東芝)製マイクと

共に玉音放送で使用された。同型機を、今でも東京愛宕山のNHK放送博物館見ることが出来る。

当蓄音器館の倉庫に、玉音放送に使われた録音機とほぼ同じ形状を持つ円盤録音機とカッターヘッドが残されている(写真5参照)。



写真 5. 金沢蓄音器館所蔵円盤録音機とカッターヘッド

近い将来、この円盤録音機の当館での展示を実現しようとしてその準備が行われている。

今ユネスコの世界文化遺産登録が話題になっているが、我が国の独立行政法人国立科学博物館にも「未来に役立つ貴重技術遺産」登録と呼ばれる制度が存在する。現在レコード関係で登録されているのは、日本コロムビアの国産最初の LP（ブルーノワルター指揮の第 9 交響曲）のみである。当金沢蓄音器館の所蔵する国産初のレコード盤、国産初の蓄音器、国産長時間再生システム「フィルモン」の「未来に役立つ貴重技術遺産」登録を目指して現在準備作業を行っている。

その登録後「音のアーカイブのまち・金沢」らしいまちになっていれればと思っている。

ここで国産最初のレコード盤とフィルモン再生器について説明を加えさせていただく。

国産最初のレコード盤については最近分かったことがあるのでその調査結果を含めて述べる。

1909 年（明治 42 年）に国産最初のレコード盤（片面の SP 盤）を日米蓄音器製造株式会社（英名 NIPPONOPHONE CO. LTD）が製造し、SYMPHONY 他のレーベルで発売した。その中に写真 6 に示す名人芳村伊十郎による長唄「鞍馬山」他があった。著作権法が未整備であったため、この後、海賊両面盤が横行し、大正に入って「ニッポノホン」の両面正規盤が発売された。

海賊盤の横行は、著作権法の整備がなされた大正後半まで続いた。

この「未来に役立つ貴重技術遺産」遺産登録のための調査に最も役立ったのは、写真 6 のレコードは勿論、当時販売された海賊盤までもが当蓄音器館に所蔵されていたことである。

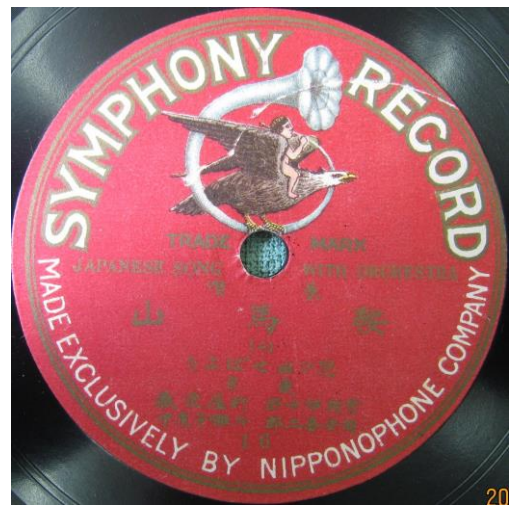


写真 6. 国産最初の円盤 SP レコード（片面盤）

（写真上）と中央ラベル拡大（写真右上）。

写真右下は後に発売された同じ録音の両面盤



「フィルモン」は、片面 3~4 分しか再生できない時代であった戦前に 35 分の記録再生を可能にした日本人の発明による画期的なシステムであった。これは音帯と呼ばれたエンドレスの帯状のフィルム（写真 7 参照）と再生器（写真 8 参照）からなり、時の平沼首相が工場見学に訪れたほど期待されたが、その工場は戦争で焼失した。その音帯とフィルモン再生器も当蓄音器館に所蔵されており、「未来に役立つ貴重技術遺産」に登録されようとしている。



写真 7. フィルモンの音帯



写真 8. フィルモンの再生機 (SP 盤再生兼用機)



写真 9. 竺覚暁氏（左、金沢工業大学 竺覚暁教授兼ライブラリーセンター長）、奥村さやか氏（右、国立国会図書館電子図書館課）



写真 10. 飯田久彦氏（エイベックス(株)顧問、金沢蓄音器館名誉会長）

竺：アナログレコードが CD に切り替わるときに、大学として LP を集めはじめた。すべて寄付だ。学生、社会人が自由に聞けるようにした。24 万枚以上ある。ジャケットデザインも人気が高い。アーカイブスに対する著作権は、従来の著作権者と違った考えで権利があるようにならぬか。アーカイブス使用者から著作権をいただかないと LP 收藏の継承が難しくなり運用が困難になるので、与えてほしいと願っている。

金沢工業大学のポピュラーミュージックの総合ライブラリー「PMC: Popular Music Collection」試聴・資料閲覧スペースを写真 11 から 14 に示す。



写真 11 PMC の資料室

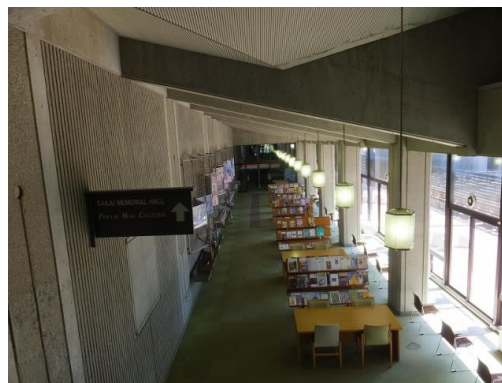


写真 12 PMC の閲覧スペース



写真 13 PMC のジュークボックスと LP



写真 14 PMC の試聴スペース

奥村：国立国会図書館での SP レコード約 5 万音源のデジタル収集の過程、現状説明をする。「著作権、著作隣接権の保護満了を確認できた約 1 千音源はだれでもネット上で聞け、全音源は公立図書館、調査研究機関など全国の歴史的音源配信提供参加館で聴ける」ことを紹介した。「米国議会図書館 (LC) の National Jukebox 20 万曲、フランス、スペイン、スイス、ラトビアなどでアナログ盤の公開が相次ぎ、紙の資料だけでなく録音資料を保存していこうという機運が高まっている」ことも合わせて話した。

飯田：曲のつくり手側から「若い人たちに申し送りしたいこと」の一つとして阿久悠さんとの関わりを話した。

「最近若い人たちにイヤホン利用者が多い。周囲の様子がわからぬ位の大音量だ。これは体に音を注射しているのと同じ。注射液は体から出ていかない。10 万枚売れてもそれまで。昔、まさに音楽が空気のように流れていた時には 10 万枚売れても 100 万人が知っていたと言われた。だから『文化』なのだ。

音楽はメロディ、サウンド、ハーモニー、さらに音の強弱が大切だ。電子楽器が駆使され、パソコン 1 台あれば曲は作れるという若者もいる。一部の放送ではロパク。生ではない。ロパクでは心は伝わらない。

『熱き心と想い』が必要ではないか。

いい歌詞が出来たと言って、阿久悠さんとは、FAX もコピーもあったが必ず会って受け取った。直接手渡しすることで作家の温度の高さが伝わる。その熱さが録音エンジニア、宣伝マン、営業に伝わって、それで多くの人たちに伝わる。もっと詞を大切にすることだ。言葉をなおざりにしてはだめ。今の時代は、そのことが希薄になっているのでは」と語る。

穴澤：欧州では、ヘッドホン・イヤホンが社会問題として取り上げられている。若い人たちの耳を守るため、EU 規制が定められ、音量をある程度以上あげさせないように規制している。かっこよく音を聴くには大きな音で聞かせると若い人たちは感心する。でも大きな音で聴けば、耳はおかしくなる。小さい音でもいい音だと思える音が必要とされている。自分の耳は自分で保護しなければいけない。是非御自分の耳を大切にしていきたい。

飯田：大会場はコンサートにマッチしていないのだが、集客が可能だからと若い人気アーティストはドームのような大会場でのコンサートが多い。しかし大会場では音が廻ってしまい、音がずれてしまうので、「イヤモニ」というイヤホン・モニターをつけている。小さなイヤモニで様々な音が耳に入ってくるのでアーティストの耳が悪くなっている気がする。

校條：ヘッドホンのインナータイプは、左右密閉型でクローズしている。これでは、どこから音が出ているか方向がわからなくなる。(方向性にたけているのはフクロウ。耳が少しずれて付いているから＝つまり左右の耳に届く音の時間がずれているために方向性が確認できる) クローズしていると自然界にある反射音が入ってこない。そのため音源側で位相をずらさねばならなくなる。これでは音が悪くなることになる。また、ピアノは左、ドラムはセンターなどと「定位」で音が聞こえるが、イヤホンで聞くとそれがわからず頭のとっぺんから聞こえてしまう。

穴澤：イヤホンできく音楽のほとんどがスピーカーできく音楽をそのまま流用しているが、これがそもそも間違いだ。スピーカーで聴いた時の自然な方向感がわからない。録音された音楽をイヤホン用に変換すれば問題点を多少解決できる。若者の間では異常な再生を行うイヤホンが自然になっている。これに慣れた若者がスピーカーで聞くとこの音はおかしいと言う不思議な現象まで起こっている。このところデジタルとアナログの違いをよく質問される。音の入り口、出口はアナログだ。だからアナログをよくするためのデジタルはいい。アナログが不得意でデジタルが得意なところで、デジタルを使うのがいい。デジタルは、切つてあるからいらぬ音は出ない。だからそういう長所が必要な場合にだけデジタルを使えば良いのではないか。デジタルは道具だ。

中学のときスメタナ四重奏団の音を聴いて感激した。それから 20 年ほどして夢がかないスメタナ弦楽四重奏団によるベートーベンの弦楽四重奏曲、モーツァルトの五重奏曲などの全曲を録音した。この時点でデジタルを使いたかった。なぜなら彼らはすごい練習をして、その演奏中でも機械的に演奏するのではなく同僚の演奏を聴きながら自分の音を直していく、これは丁度一流の哲学者が議論をしているのに似ていると言われている。まさにその効果が欲しかったから 40 年以上前にデジタルを使った。録音機や再生機に回転系の回転むらなどがあるとこの哲学者の議

論が聴こえないのである。自分勝手に弾く人やそれをあてにした曲には、この哲学者の議論は不要なのかもしれない。

今やデジタルはインターネットの主演となっていることも無視できない。当蓄音器館の魅力を多くの人達に伝えるのにも役に立つと思うのだが。

八日市屋：いまの時代はどんな時代で、これからどんな音が残るのか？ SP時代の音で、今も残っている曲はある。どうやったら残れるのか。

飯田：今の若いかたの作り方は「曲先（きょくせん）」。曲ばかり先につくる。どんな詞？ どんなタイトル？ と聞いてもまだ決まっていないという返事が返ってくる。それはおかしいのでは？ と、思う。余りに言葉を大事にしていないのではと思う。曲づくりというのは常にヒットチャートにないもの、誰もが考えつかないもの、まねできないものをポケットにタイトルの20も30もいくつも持っていなければならない。思い付かねば書店に行って本のタイトルを見てみる、本のタイトルからヒントがあるかもと言われた。それで生まれたのが小泉今日子の「なんてたってアイドル」。

「秋元康さんだって曲先ですよ」という人がいるが、それは違う。秋元さんの頭の中には詞のテーマ、どんなタイトルがおもしろいか、裏切れるかなど多くある。それでテーマを考えている、曲の作り方はそういうものだ。

最近サウンドやダンスばかり重視されているのでは？ CDが売れなくなり、「360度ビジネス」と称してグッズ、コンサートや取り巻くものも売っている。レコードビジネスは、どんどんスリムになってきている。やはり何枚売れるのか、ヒットするのか、物作りの人たちに聞かれると委縮することもあるだろう。クリエイティブマインドとコストマインドと両方マインドを持たねばならない時代だから。

でも、今の時代に欠けているものは何かを常に考えていなければならない。

時代の匂い、日々変化する時代の息吹を感じて、アーティスト、曲づくりをする人が同じ価値観をもってお互いの美学を作品に当てることが大切ではないか。

若い方とシンパシーが違うので賛同されないかもしれないが、私はそう思う。

八日市屋（終わりにあたり）

アーカイブというとすぐにデジタル化という言葉が出てくる。テープで原盤を残した時代もあった。その時代、テープは最良の残し方だったかもしれないが、今はテープを使わず CD、USB、などでデジタル化することが最善という。金かけて残すというより図面と同様、レコードの周辺にあるものも含めて原盤をそのまま残すことがまず大切ではないか。蓄音器を使ってその時代の音で聞くことが、人々の生きた姿を残し、未来へこんな時代があったことを伝えることになり、アーカイブの本質ではないだろうか。

追記 1. 途中演奏 SP レコード盤：エルビス・プレスリー「ハウンド・ドッグ」、猫いらずレコード「国益演説」、ジョー・スタッフォードとハリー・ジェームス楽団「イツツ・ビーン・ア・ロング・ロング・タイム」V-DISC 盤

追記 2. このシンポジウムの模様は 3 月 28 日 17:20 より、テレビ金沢にて「音楽を保存するまち・金沢」と題して放映

筆者プロフィール



八日市屋典之（ようかいちや のりゆき）

慶應義塾大学法学部卒。

金沢市を中心にレコード、オーディオ販売の卸、小売店を経営。

アンサンブル金沢をはじめ金沢にし・ひがし芸妓連、地元にはゆかりのある歌手等の作品集など地域の音楽文化を盛り上げるため、数多くの CD、DVD のプロデュース、制作を手掛ける。平成 15 年 11 月より金沢蓄音器館館長。

金沢蓄音器館のホームページ <http://www.kanazawa-museum.jp/chikuonki/>